

「福音を伝えよう！ ―グットニュースと広報―」

マルコによる福音書 16章 14～18節

広報センター所長 山下 研一

神奈川県でこんな事件がありました。このことから話をはじめたいと思います。

福島第一原発事故で横浜市に自主避難していた中学一年生の子がいじめを受けて不登校になった。調べてみると同級生らに金銭を要求され150万円を上回る額のお金を払っていたという事件です。いじめの背景には福島県出身ということでの差別があったといえます。

この事件の根が深いのは今から2年前にすでに親が家からお金が無くなっていることに気が付き警察に相談していたということです。その時の調べで同級生から5万から10万円を10回以上要求されていたということがわかりましたが、事件性がないということで警察は動かず、このことを学校側に通報しています。学校側も「重大事態」と認定しませんでした。重大事態とはいじめ防止対策推進法に基づく規定で「いじめが不登校、財産被害など深刻な結果を招いた疑いがある場合は「重大事態」として第三者委員会で調べるよう義務づけています。このことは2年前のことです。2年間放置されたということです。今回すでに転校してフリースクールに通うようになった生徒のご両親が代理人をたてメディアに訴えて明らかになりました。全国で同じようにいじめで苦しむ子どもたちに「死を選ばず強く生きてほしい」という生徒の思いがあったといえます。

このニュースは広報ということを考える上でいろいろな意味合いを含んでいます。2011年に起きた大津いじめ事件で学校側の対応の甘さが問題になり、2013年にいじめ防止対策推進法が制定されたにもかかわらず、ほとんど同じような事件が起きたということになります。幸いこの生徒は死を選ばなかったことだけが違うところです。

報道はセンセーショナルにニュースとして取り上げるだけで問題の真相に迫ろうとしません。いろいろな事件の報道を見るにつけそのことを痛感させられます。このことはまた別の機会にお伝えできればと思います。

さて今日はこの事件の中で出ている震災および福島第一原発事故が子どもたちの心に残している陰のことを考えてみたいのです。

聖学院大学は東日本震災以後、ずっと被災地の支援活動を続けてきています。全国の大学でも様々な形で復興支援のボランティアが行われていますが、本学のように長い間に渡り、地元の人々と

の交流を深め、単に復興を支援するボランティアから心の交流まで至る例は数少ないと思います。なんでもメディアに取り上げられていますので、私たち広報の仕事をする者にはこれに携わる学生、教職員のことが誇りです。このプログラムがボランティア活動というだけでなく、活動を通じて私たち学生や教職員自身の教育にもなっているということを思います。

広報センターでもお手伝いしている活動があります。『子どもの心にそっと寄り添う』という震災で傷ついた子どもたちの支援をしている人に向けたリーフレットを毎年、3月11日の前に取材・編集・発行しています。

第5集まで発行し続けています。今年は熊本地震が occurred のので、すぐに東日本大震災の1年目に発行した第1集を再編集して熊本の幼稚園や学校、自治体に送りました。いじめの問題でもわかるように、「ことば」「コミュニケーション」のことがかならず影響しますので、その注意点や具体的な相談の窓口を伝える内容になっています。

『子どもの心にそっと寄り添う』は第六集を迎えています。あれから6年、その時小学生だった子どもたちが就職・進学の問題に直面しています。震災を契機に将来の職業を考え始めた子どもたちがいます。その支援をしている団体があればそれを紹介したいと思い、夏から取材を始めました。はじめはこれまで関係のあった学校、施設、基礎自治体にアンケートを送りました。まずは取材の手がかりとなる情報が欲しかったのですが、そのためにはアンケートが一番です。その中に関係が深そうなところを紹介してもらうわけです。

アンケートを集計してみてわかったことは想定した就労就学を今も支援しているところが少ないということです。高校の現場でもそこまでできていない、むしろ貧困の問題が大きいという回答が大半でした。それでもいくつかの高校から取材の協力を申し出ていただいていますのでこれから取材します。

その中で公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンという団体とコンタクトができました。貧困のために就学機会を失っている子どもたちのためにバウチャー券を発行し、それで塾や予備校、習い事、職業訓練などにバウチャー券を使って通うことができます。毎年の活動報告書の他に昨年は「東日本大震災被災地・子ども教育白書 2015」を発行し、アンケート、統計資料をまとめています。ここから浮かび上がるのも貧困というものですが、その中に未来を考える子どもたちの姿が浮かび上がってきていることは希望です。看護師になりたい、お医者さんになりたい、教師になりたい、警察官、消防士、自衛隊員、自治体で働きたいなどの子どもたちが出てきていて、それはバウチャー券を利用しています。

広報というのは英語では、Public Relations といいます。

似たものに広告・宣伝というものがありますが、こちらは Promotion とか Advertizement という英語を

あてます。

Public Relations すなわち Relation ですからこれは発信しっぱなしというわけではなくコミュニケーションが基本になるものです。さらにそこには伝えたい「メッセージ」が含まれます。

このメッセージということばは、聖学院では東北伝道と社会運動に身を捧げ日本で亡くなり青山墓地にお墓のあるチャールズ・ガルスト師のことを思いださせます。ガルストホールにレリーフがあるガルストさんのことです。彼の最後の言葉が「My life is my message」でした。クローバーの種をまきながら貧困に苦しみ東北の農民のために地主からだけ税金をとるとい土地単税論を説いてまわります。単税太郎と自らを称したことは有名です。それが明治期の日本の社会運動に多大な影響を与えました。

聖学院大学出版会から「単税太郎 C.E.ガルスト 明治期社会運動の先駆者」L.D.ガルスト著/小貫山信夫訳『チャールズ・E・ガルスト』という2冊の本がでていますので関心のある方はぜひお読みください。私はこの「My life is my message」ということばを広報の観点から掘り下げてみたいと思っています。

最後になりましたが、広報は good news を伝える役目を担っています。Good News はそのまま訳すと福音のことです。よき知らせということです。

そしてその良き知らせこそ、イエスの誕生、伝道、十字架、復活を伝える福音です。希望の光として誕生されたイエスさまの聖誕を祝うクリスマス。その日を迎えるための期間として4週間をアドヴェント（私はカトリックの信者ですので待降節）として準備します。

クリスマスはほぼ冬至の日の近くにあります。

世の中がもっとも光が少ない、暗いニュース bad news が多いなかに Good News を伝えていくのが広報です。

寒さの中でも心をぎゅっと引き締めて、聖学院から良き知らせを伝えていこうと考えています。

ありがとうございました。

2016年11月29日 聖学院大学 全学礼拝